

近世語の言語景觀小見

——近畿・東海方言の地理的状況をめぐり——

彦 坂 佳 宣

はじめに

現代の近畿地方と東海地方のことばに大きな差異があることは、明治の国語調査委員会の調査などにより解明されてきた。否定や断定の言い方、形容詞連用形とハ行四段活用連用形の音便など方言差の大きな指標になるいわゆる東西方言の対立的事項の境界も、この間に存在する。そして、それはそれぞれの時代の言語事象の盛衰をひきついで出来上がっている。では、近世にさかのぼっての状況はどうであらうか。小稿では、いわば今日の方言の地理的差異ができる一歩手前の時代について考察を試みようと思う。

近世語の研究は、江戸語と上方語の比較などはあるものの、地理的広がりをもって連接する方言間の状況についての考察はほとんどない。資料の制約のためであるが、これが解明されれば現代方言の歴史的背景への理解も深まることであらう。ここでは上方方言に、今まであまり取り上げられなかった周辺方言として伊勢

・濃尾・三河の方言を加えて、不十分な材料と範囲の試論ながらもその地理的展開の模様を点描してみようと思う。しかし、記述は事象相互の平面的な比較になりがちで、体系レベルに及びにくい。いま表題を言語景觀としたのは、この故である。

一 近世期の問題

先の各方言間で差異のある事象も、歴史的にはそれぞれ異なる時期の消長を個別に経たものである。それが今日に及ぶ場合もあるし、消え去ってしまった場合もある。その伝でいけば、近世には近世に固有の言語状況とその推移が見られるはずであり、これを歴史地理的な観点から比較検討することが課題とならう。さらに進んでは、その消長の要因を方言体系の内外に求め史的説明に及ぶことになるが、ここまでは難しい。

この時期の問題としては、最低限の共通項的なものだけでもさしづめ次のようなものがあるう。

音韻ではハ行・サ行頭子音の音価、合拗音の存否、語法では二

段活用的一段化など活用体系の変容や所属語彙の問題、各種助詞・助動詞（辞的題）の存否と形式など、他に敬語形式やその運用の問題、語彙の様々な問題などである。

今はこの内から、材料が得られる合拗音、活用体系、辞的語や尊敬語の形式を主にして述べてみる。

なお、ここで主たる資料とするものは、上方や尾張の洒落本・滑稽本や伊勢、美濃、尾張、三河の各地に行われた雑俳である。とくに雑俳は庶民の文芸として近世を主に行われ、卑近で口語性の豊かなものも多い。今までその有用性が説かれながらも、活用されることの少なかつたものである。伊勢は宇治山田周辺を主としたもの、美濃と尾張はほぼ活動圏を同じくし、時に三河がこれに加わることもあり別個に活動することもある。濃尾、三河は事象に即して、まとめたり区分したりして説明する。また、考察には今日の方言調査の成果も参考にする。

二 方言間の状況

以下に上方、伊勢、濃尾・三河の三要地の方言を比較して相対的に見られる特色を、仮に次の三つに分けて述べて行く。(1)三要地に同じ面、(2)上方、伊勢、濃尾・三河へと古態性のます面、(3)この逆に、進取性あるいは異質性の多い面。これらは、当面の地域の方言間の関係を語るところが多いものと思われる。なお各事象の考証的な面は今までの個別論文によるところが多く、紙数の関係もあるので今は最低限の例示にとどめざるを得ない。

また上方語については先学の研究も多いため、ここでは伊勢、濃尾・三河を主として論じることとする。

(1) 三要地に共通な面

これには東西方言の対立的事項のうち否定辞が「または」であること、形容詞連用形がウ音便となること、一段活用系の命令形語尾が「ヨ」を主とすることがあげられる。こうした基本的な事項で共通していて、これらの地域がともに古くから西部方言に属することを語る。

しかし、同じ東西対立的な事項でも、濃尾以東ではハ行四段活用が促音便をとり、断定辞が近畿の「シャ」ないし「ヤ」に対して「デア」であること、また形容詞音便は今日の分布からすれば東三河以東はウ音便化しないなどの点は異質的な面も強い。濃尾から三河へと移るにつれて近畿的性格から逸脱する面をつよくするのである。これらの面については後に述べる。

(2) 上方、伊勢、濃尾・三河へと古態性のます面

氣付いたものの限りでは、これに属する事項は(1)よりも多く、中央の近畿から次第に遠ざかるにつれて歴史的に古い言語の層がみえるものとしてよい。いわゆる方言圏論的なモデルのひとつともみなし得る事項類といえる。

まず代表的なものに断定辞があげられる。上方では「ジャ」が普通であり、幕末期に「ヤ」がこから生じたといわれる。伊勢では「ジャ」であり、「ヤ」はみだしていいない。濃尾・三河ではこの時期「デア」が一般的である。これは「物類称呼」「和訓栞」「馬琴「騎旅漫録」な

どに記述があり、尾張洒落本でも「名古屋言葉のデヤは江戸のダ、上方のジャといふにひとし。デヤとはなしてよむべからず、デヤと統てよむべし」(文化12年 東花元成 名古屋見物四編の綴足)と世人の注意をひいている。作者の居所が添えられている難俳によれば、

お庭が咲て粉になるデヤ 津島(安政6 たまかしは六)

日間賀出来でやで海苔あらい 参州吉良(安政期 たまかしは七)
大はふつつり飼ふデヤない 大垣(安政5 とがへり集)

など多く、最後の例のように「では」による形式も加えれば西美濃から東美濃、尾張から三河にまで用例が広く分布する。

また、「木曾道中膝栗毛」でも近江西部から木曾までデヤがみえている。

デヤは断定の言い方がデアルからデアとなり、これが一般には東日本でダ化し西日本ではジャそしてヤとなる、その中間に位置するものである。京都ではキリシタン版「伊曾保物語」に1例みえるのが有名である。この中央語における中世末のものがここに尾をひいて広く分布するのである。今日の東西対立的事象のうちこの事象については、近世において西のジャ東のダの間にあって中和的地域を形成していたことになる。

辞的事項にも(2)に属するものは多い。一例を推量・意志の助動詞にとつてみる。かつて室町時代の京都ではウ・ヨウとウズとが共存していた(その使い分けには議論があるがおく)。近世には、京都ではウ・ヨウ形に統一され、これはやや西の伊勢でもおなじ

である。

吞ンで見しよかと詰らかす(41-3)

どう寝よふぞといふて居(41-9)

濃尾では、ウ・ヨウのなかに次のようなウズが互角に現れる。

おれもかわ(買) わアづとおもつたが、じつきあこ(赤) こなげなでき(洒落本 女楽巻)

明に出る戸 何来とラアズ待つたがい 守山(万延元年 風見草)

細部をみれば各地で動詞類との接続の形式に差異があるが、これも周圍論的な例となる。その打ち消しの意味のマイもマイ(カ)形で勧誘表現となったこと、狂言などによくみえる。京都では近世にはすでにこの用法はなく、伊勢と尾張ではなお多用され、

何ぞ唱えて見るまいか(伊勢 27-1)

エイ男ばか見とらまい(尾張 たまかしは七)

そして今日でも濃尾・三河で多用される。

接尾語的なーカス形の存否もこれに入る。京都では中古からみえ中世に多用されて衰退するが、伊勢ではみえ、濃尾・三河ではよく見える。

かか 只眼中中で見しらかす(伊勢 41-3)

角髪すつはらかいて来る(尾張 天保4 都のみやびを)

体系的な組織をもつ敬語辞でも以上の傾向は顕著である。いま尊敬語述部形式について三要地の難俳例などから単純集計して表1にしるした。

表1 三要地の敬語辞

事 項 地 名	遊 バス	ナ サル	ナ サル * ナ サ レル	ナ ハ ル	(サ)ン ス	ナ ン ス	(サ)ン シ ヤ ン ス	オ 十 一 段 式	(サ)シ ヤ ル	ヤ ス (ヤ ン ス)	(ラ)レ ル	ヤ ル	ゴ ザ ル	ゴ ザ ン ス	テ ジ ヤ	ハ ン ス	連 用 形 ナ ジ ヤ
上 方 雑 俳	65			11	6	4		11	18			22		6	17		4
伊 勢 雑 俳	5	35			12		9	11	113	1	106			123	8	4	3
名古屋洒落本	23	90		44			1	28	7	57	3	2					3

上方雑俳は寛政から慶応までの27点、伊勢雑俳は文化・文政を中心に20点、名古屋洒落本は寛政のもの4点である。事項はマスが下接するものや上にオが来るものなどを含むが、ここでは単純な形にして集計した。動詞用法・補助動詞用法の区別もしないで一括した。左からほぼ待遇の高い順に並べてある*印の形式は名古屋に特有のものである。

上方の形式の消長は先学によってよくわかっている。近世前期には(サ)ンス・ヤル・(サ)シヤルがさかえ後期にはこれに替わりナサル・ナハルや「お行きる」「お呉れる」などオ十一段式の形や「てじゃ」などテ十指定辞が盛んになったとされる。なかでも(サ)シヤルからナサル・ナハルへの転換がその代表といえると思う。これらは主として洒落本を資料とした研究成果であるが、私は雑俳例も参照すると、右の大概は認めるとしてもう少し(サ)シヤルが後まで残り、ナサルからナハルがうまれ認知されるのは遅れると考えている。表1には(サ)シヤルが多く残り、ナハルの例は多いもの特殊な場面に出やすいのである。雑俳例をより庶民的な言語状況のあらわれとみての解釈である。

さて、伊勢では、表1でみるとおり後期でも(サ)シヤルの勢力は強く、

夢売り 銭ハ見やしてからの事(26—3)

いろはしやんたと云ふて居(41—9)

後の例のように対面者にも使用する勢いである。(サ)ンス・(サ)シヤンスといった(サ)シヤル系の形式がみえることも(サ)シヤルの勢力の温存されている証拠であろう。上方では尊敬語としては古くなったゴザル類もここにある。

にここ地取り見てござる(26—1)

こうした中にアソバス・テ十指定辞(テジヤ)、オ十一段式などもみえる。これらは近時の上方からの伝播によるものであろう。使用例からみてアソバスは特に丁寧なものであり、普通はナサルが

伊勢でもっとも高い待遇の形式と考えられる。そして、また一方では上方語に対して特に異質な形式はみつけない。概要としては、上方語の直接的な影響下にあり、やや古態をとどめるとしてよいであろう。

上方は従来の洒落本との対比のため、伊勢は他に用例数を提示するに足る資料がないため雑俳によったが、濃尾は尾張の洒落本の例をしるした。表1によるとここにもアソバスがあるが上層町人に限られ、上方語などでナサル形であったものはここではナサル形で現れて、これが普通にはもっとも高い敬意のものである。やや軽い敬意で多用されるのは(サ)ツセル・(サ)ンス・オナ一段式といったものである。特定動詞では「行く」などの意味のゴザル・ゴザラツセルも多い。一方、雑俳では、アソバスはまずなく、(サ)ツセル・(ラ)レル・ゴザルなどが多用され、ナサレルはナレル形としても多い。要するに洒落本と比べてやや低く親しみやすい形式が多用されている。上方の場合と同じく、雑俳により庶民的な様相が観察されるといえよう。

いくつか例示しておく。

関取さん 虫歯で一夜泣きなれる(嘉永6 たまかしは三)

およしさどこ行かんす：今日は髪結はんしたの(寛政11 洒落

本 朋多好齋)

何事じや 法華の衆も行つせる(天保12 純太箸集初篇)

(奉公先を) きやめて(決めて) おいでたか(女楽巻)

頼まれて居仲人 晩にちよこりとごさつたり(純太箸集)

以上によれば、上方で後期に盛んなアソバスは伊勢と同様に特定層にかぎられ、テ+指定辞も多くなく、オナ一段式はいくらか使われるものの、概して(サ)ンス・ゴザルそして(サ)シヤルに相当する形式が方処化した(サ)ツセルなど上方語ですすでに古態のものがみえる。(サ)ツセルは第三者への待遇ばかりでなくまた対面者にも使用され、ゴザル、ゴザラツセルも同様である。文字どおり上方語では古態のものが、ここに盛行している。(サ)ツシヤルが(サ)ツセルで現れ、ナサルがナサレル・ナレルで現れるなど地方的形式の問題は後に述べよう。

敬語述部ばかりでなく、代名詞の形式でも同様である。各種形式の一覧は省くが、例えば上方語の後期には第三人称をさすことがすでに少なく二人称の意味で使われるアナタは、伊勢でも尾張でもまだ第三人称のものもみえる。

濃尾には、中世京都で盛んであった二人称のコナタ・ソナタ・オヌシも残り、オヌシはオノシ・オンシとして現れる。

なお、敬語形式については三河の雑俳には現れにくく、今日東三河以东がいわゆる無敬語地域であることと符合する。形容詞連用形のウ音便のないのとともに、三河以东の異質性もみえてくる。以上によれば、ほぼ伊勢から濃尾へとよく古態性のみられることが了解されよう。

(3) 伊勢あるいは濃尾・三河の進取性・異質性の面すでに(2)の説明の中にも伊勢や濃尾には上方語と異質な形式や性格のものがでてきた。次に、この面を考えてみる。

(2) で扱った事項は異質的といっても史的に古層の面を強く持つもの、この項は上方語に対して変化の早い面、異質な方向性の強いと思われるものである。この場合は、氣付いた事項の範囲でいえば上方と伊勢に対して尾張以東の異質性が特に強い。

まず先にみた東西方言の対立的事項の問題がある。ハ行四段活用がウ音便をとるのは上方は勿論、伊勢も同様である。

下へオリヨカといふて也 (41-4)

濃尾では、これが促音便で現れる。名古屋洒落本のほか雑俳によれば、

建場の冬枯

銀杏喰ツた小猿病む 岐阜雨木 (文久2年 清

蘭集)

松葉かく兄

馬摺んで狂つて行 美濃上ノ内五面堂(安政頃

たまかしは七)

の例があり、これらによれば、今日のウ音便との境界に近い美濃西部の線がかびあがつてくるのである。

もうひとつ、形容詞連用形がウ音便をとるかそのままかの問題は、資料での実証がしにくい。今日は愛知県東の三河の東西を隔てる線にはぼ重なつてこの境界がある。しかし、この地域をおおう雑俳も文語的な表現にはウ音便をとってしまうこともあり、地域差は実証できないのである。しかし、他の対立的事項も今日の境界とよく似る点、この場合も同様なことが推測される。

音韻の問題では合拗音の存否があげられる。この事象はまだ述べたことがないので、少し例を多くあげてみる。

まず上方では合拗音クワ、グワの類が、多少の例外を除き原則として直音と混同されることがなく保たれているとされる。結論的にいえば、これは洒落本や雑俳でみても同様であると言える。上方雑俳は広い年代にわたる資料がみえる。いま洒落本類の少ない近世末期の天保期から「冠吟言葉の種」(天保14 大阪版)の場合を一例にとり整理してみる。

繁花^{はな} 梅花^{ばい} 願望^{ぐんぼう} (以上 各2例づつ)
冠吟^{くわんぎん} 廻廊^{くわいろう} お願^{おぐわん} 官女^{くわんぢや} 樊噲^{はんかい} 門^{もん} 勸進^{くわんじん} 西瓜^{すいか}
果報^{くわほう} 菓子^{くわし} 薬罐^{やくわん} (以上 各1例)

右のように合拗音表記は直音と区別されている。この表記は擬声・擬態語にも及び、ほかの資料では漢語の仮名書き例もあり、こうした状況が一般的といえるのである。

右の傾向の中で一見異例ともみえる次の例は、

確執^{くくしつ}を破る隣の愛さかり 浪花^{なな} (天保5 卯之花衣 8才)
格別^{くくべつ} 実に鶴^{くわくしやう} 空に入り (天保15 浪花みやげ21ウ)

先学の指摘によれば、合拗音表記が慣用されたというものである。異例としては、多くの雑俳資料の中で次のような例をみた。

⑦ いろいろに 日光山^{にっこうざん}のせめ道具 (元禄16 俳諧かざりわら 4ウ 宝永元年 生鱸に再収のものによる)

④ よくくじや れがいがならも最うとらしやませ (正徳3 削かけ 24才)

しかし、⑦に予想されるクワ表記は、国語化した合拗音の中では早く直音化したものとされる長音類に属している。また他の箇所

では合拗音としてもみえる。④はこれを「慮外」とみれば異例であるが、句の傍らに「酒也」とあり、また「れが^い」も不審である。さらに合拗音のうち濁音のものは直音化が早めであったという傾向がここにも当てはまるとすれば、一般的な直音との混同例の証左とするには不十分である。紙数の関係で洒落本例の提示はおくが、ここでも慣用表記や直音化の早い例とされるわずかな例を除けば、問題にするものはほとんどない。

以上によれば、やや混同の兆候を窺える程度といえよう。

次に伊勢地方の状況はどうであろうか。

この期の伊勢方言については、今まで村山七郎『漂流民の言語』(吉川弘文館 昭和40)によって、わずかに知られる程度であった。そこに伊勢白子出身の大黒屋光太夫が十八世紀後半、ロシアにおいてヤンコーウィチによる『欽定世界言語比較辞典』の改訂に際して提供した日本語約三〇〇語の紹介とその研究もあり伊勢方言の手がかりがみえている。

さて雑俳にみえる合拗音表記の例は延べ二〇数例、異なり語で一〇余例と少ない。これらは、みな表記を誤ることなく、また直音を合拗音に表記するものも今のところみられない。例えば、

くハほうもの、^い楽し^いな奉公をする (文化初期以前 25—4)

休ミにく^いわし^いをくふて居 (文化初年 25—15)

人がらノよい男だて

けんくわニ扇子かざしたり (文化8 41—6)

妖怪姫 (冠付け題)

といった例である。合拗音の期待される漢字表記はおおむねの振り仮名がないため多様な例は集まらならないが、まず混同例はないとしてよい。

光太夫のものにも二例みえる(村山氏のローマ字転写による)。

喧嘩 *Hehka* ケンクワ

一〇〇文 *Ikwan hon* イクワンモン

これも誤例はなく、両者の傾向は一致する。

今まで、この地で合拗音がなおよく保持されていたことは、伊勢出身の谷川士清『和訓栞』の記事から間接的に推測されていた。右の諸例は、これを具体的に裏付ける一例となる。

濃尾の状況にうつる。

ここでは合拗音が直音と混同していること、すでに福島邦道氏が平曲の例をあげている。しかし、その例はすくない。近世に入り文化頃の混同状況は芥子川律治氏に洒落本例をあげて指摘がある。⑤。そして、この時代までくれば類例は他の資料にも比較的容易に見られるようになる。熱田生まれの女性「きの」が金毘羅の口真似で語った文化文政頃の如來教の説教を逐一記録したものには

全快 (文化2年5月8日条)

開山方 (文政2年3月19日条)

などの混同例がある。この記録は、信者の一人で、きのの説教を組織的に記録していた「お綴り連」の一員かまたはそれに近い位置にいたと推測されている尾張藩士刑部玄朋の筆になる浄書本にみえるのである。

や時代がくんだり天保以降にみられはじめの雑俳には、尾張だけでなく、美濃・三河の雑俳作者による句に混同例が現れている。作者または連の居所を記したものを捜せば、

あき告る鐘 瘦せた指から丸薬洩る 三州 吉田(安政4年

頃 たまかしは五)

流石先生 展観春画とハ玄い 挙母(文久2 清蘭集)

親船の若衆 鳥鍋喰て外科医聞く 美濃竹が鼻 (たまかし

は五)

など西美濃から三河までの例がみえる。これらの中には、「夫婦喧嘩」(安政6 久礼多氣集)「過去帳」(たまかしは六)など、日常的な語の混同例のあることにも注意される。

先の福島氏は、上方に比べ関東にこの混同が早く、中世から近世初期の時期にもすでにあることを述べる。ここでは、三河物語や江戸近辺の資料が主で用例もわずかであった。ここでは、伊勢や濃尾について加えたのであるが、時代が下って用例もかなり増え、一般的な言語状況について窺えるのである。ただ、伊勢よりも上方での混同の兆候がみられたが、これが一般的な様子なのか伊勢側の資料例の少なさによるのかは判断しにくい。もし前者とすれば、上方に対して伊勢の古態性が認められ、濃尾・三河はこれらとさらに異質的な地域であることになるが、宿題としたい。

以上によれば、上方や伊勢でなお合拗音がかなり保たれているのに対して、濃尾・三河では混同が容易にみられ、直音化が強かったものと考えられる。

体系的な面の強い事象としては、活用の再編の問題がここに入る。古代語から近代語への変遷のなかで、二段活用の一段化は大きな転回点であった。これに前後してナ行変格活用の四段化、ナ行変格活用の四段化などがおこっている。

このうちナ行変格活用をのぞく変化には地域差がよく認められる。まず、「死ぬ」「往ぬ」のナ変についてみよう。

上方語のナ行変格活用の四段化については、後期までナ行変格活用が保たれるとの説が洒落本の状況を主たる根拠として有力であったが、雑俳を参照するとかなり早くに四段化が進行していたと考えられることは以前に述べた。両者を総合すれば、卑近な口語で四段化がすすむ一方、従来のナ行変格活用も保たれていたと解釈するのが妥当と思う。

伊勢ではどうであろうか。複数の四段化例をみるものの、一方で文化期に至ってもナ行変格活用の例も多く、全体にこれがまきるのである。

揃ふて死ヌをうれしが(宝暦9か 41-8)

死ヌとはあまい謀ト(文化2 41-3)

死ルといふた顔もせぬ(文化8 41-6)

村山氏による光太夫のものには、

死 jinu, jiuiru, jinuru

ヌム ムムル ムムル

とある。改訂前のパスによる記述は「jinu」と四段化例の可能性が高い語形であり(これは南部および九州の漂流民によると推

測されている、右のシニル、シヌルは伊勢出身の光太夫が付加した形式であることは疑いない。これはナ行変格活用の活用系列を表示したとも四段型形と併置したとも思えて決め手を欠くが、少なくともなおナ行変格活用型の存在は大きかったとみて間違いないであろう。両資料を見合わせると、伊勢でもナ行変格活用がなお根強かったと思われる。

尾張の状況は、すでに芥子川律治氏が四段型の優勢なことを指摘している。たとえば、

エゝふがないこのうき世、いままでしたるくろふもいまかぎり、いつそしぬならふたりいつしよにはゑしな^①いでわしや先へこのよふに行わいナア：おまひのなんきもみなわしゆへその言わけにしぬるがまし^②か（文化² 駅客娯穿）

と口説きの場面には両者が現れるが、全体には完全に四段型がまざる。難俳にはこの語がみえにくく四段型の地域の広がりを示すことはできないが、かなり広い範囲でおこなわれたことは想像にたかくない。

また尾張にはナ行変格活用に「往ぬ」の語は見られず、上方語で「死ぬ」「往ぬ」の二語をもつのと違いがある。「往ぬ」の境界は今日の調査によればほぼ岐阜県と滋賀県の境の模様である。伊勢については、難俳に「往ぬ」がみえないが、今日の方言にはあるらしく、上方とおなじ二語であったことが推測される。四段化の遅速とその所屬語に差異がみられるのである。

次に二段活用の一段化に関連する事象をみよう。この事柄自体

は中世を主とする出来事であるが、類縁のものにその方处的な遅速があったと考えられる。

上方語では、使役の助動詞と「くださる」「なさる」「さっしゃる」など動詞相当に「（ら）るる」尊敬語がついて一語化したものが四段活用化したことが指摘されている。^③

伊勢でも同様な状況である。いくつか示しておく。

炬燵へ誰も当らさぬ（41—12）

そふさと言ふて間違はず（41—12）

いか物喰イをなさる也（25—14）

御呼ばりなさりやよい事を（41—1）

これに対して濃尾では、使役の助動詞のものは一段化例もかなり混じり、敬語はナサレルあるいはナレル、クダサレルあるいはクダレルと一段化した形である。サツセルについては、サツセル形を近時まで使っていた地域が報告されていて、やはり一段化例の証左ではないかと思うが、未確認なのでしばらくおく。しかし、大勢が一段型であることは動かない。

上方語で四段化したのは、一般的な一段化の趨勢がまだ使役・尊敬の助動詞など辞的要素に及ばない時期に、他の方向にひかれて四段型化したと考えられている。伊勢も同様の方向性をもったとも思えるが、むしろ上方語からの影響による伝播の結果と考えた方がよいと思う。濃尾ではこれらが一段化していた。この差異の経緯はかつて述べたが、二段活用の一段化が相対的に近畿地方よりも早く、上方語で四段化する以前にこれら辞的要素をもつ

語も一段化してしまったものと考えられる。四段型のナサルは、尾張でも使われるが、洒落本のうちでも遊里を描く資料に限られ庶民層を描くものには一段型が圧倒的であって、両形式には位相的な差異が見られるのもこの経緯を反映していると理解すれば矛盾がない。この他、サ行変格活用が上方と伊勢ではスル形であるのに、濃尾・三河はセル形である。ただ美濃には今日の状況からみてあるいはシル形もあつたかと思われる。これも変格活用が他の主要な活用型にひかれた結果であり、活用体系の規範の緩さが濃尾・三河に強いことを語る。

なお「借りる」「足りる」の語の活用は、上方・伊勢は四段型であり、濃尾・三河は一段型を主とする。

音便のうち「指した」を「指いた」「落とした」を「落といた」などとするサ行四段活用イ音便は、音便化の程度に差異がおおい。今日では普通音便化しないが、京都では中世にこれが活発であり、近世になると次第に衰退し「指す」くらいに名残をとどめる程度となっている。伊勢でも

かんざし 落チて来そふにさいて居(41—2)

などと同様である。ところが濃尾・三河では

どうぞ早う能成升ならなをいて上てお呉被成といふが：(お経さま)

あれはぜんたい陽気さんが、なんのかのとわる知恵をかい(貸)なさるから(享和2 指南草)

など例がおびただしいことと、中世京都で音便化しがたいとされ

る「貸す」の音便化例まであり、今日でも名古屋周辺に盛んである。古態の性格と同時に広い範囲の語にも及んでいて、地方的な盛行のさまをみてとれるのである。

(3) にあげた事象は、以上から分かるように上方と伊勢の共通性をきわだたせ、これに対し濃尾から三河へと特に異質な性格の増すことをしめす。ハ行四段活用と形容詞の音便など古くから東西対立の事項に属する事項がここにあることは、古来から近畿と東海との言語差があつたことを語っている。合拗音の衰退・活用体系の再編など近時の変化になるものは、上方や伊勢の属する近畿地方が規範保持の傾向をもつのに対し、濃尾・三河にはこれが薄いことを語るものである。それだけ変化を先取りしたり独自の変容をとげている。

おわりに

地理的な広がりをもつ近世語の研究のころみとして、三要地の方言を注意すべきいくつかの事象をもって点綴してみた。

(1) — (3) を総括すれば、三要地の方言は西部の方言としての共通性はあるものの、上方に対し伊勢はその直接的な影響下にあり古態性をもちながらも同一圏の様相を呈し、濃尾は間接的な影響にとどまり古態性をもちつつ異質性をつよめ、三河はさらに古態性をまじえながら独自の性格を強めると言えようか。

方言間の状況について、結論的には今日のそれと大差ないこととなったが、近世期の方言相互の実状を比較する点にいくらか意

義はあろう。

- 注① 拙稿「後期近世語資料としての雑俳」(『島田勇雄先生古稀記念
ことばの論文集』明治書院、昭和56所収)、「近代伊勢方言史小考」
〔文学・語学〕第98、昭和58・7)、「近世後期上方語資料としての
雑俳」〔文芸研究〕107、昭和59・9)などで雑俳資料と各方言の様
相を述べた。
- ② 拙稿「愛知県方言の分布と歴史ノート(1)」(『名古屋・方言研究
会会報2』昭和60・3)。
- ③ 上方語については、山崎久之『国語待遇表現体系の研究』(武蔵
野書院、昭和38・4)、矢野準「近世後期京坂語に関する一考察」
〔国語学〕107などを参照。濃尾については拙稿「洒落本類からみ
た近世後期尾張方言の待遇表現体系」〔国語学〕116、昭和53・3)。
④ 注①の上方語に関するもので述べた。
- ⑤ 『講座国語史2』大修館、昭和47)など。
- ⑥ 橋本進吉『国語音韻史』123ページ。
- ⑦ 福島邦道「江戸語の音韻と東国方言」〔国語〕第2巻234合併
号、昭和29・9)。

- ⑧ 芥子川律治『名古屋方言の研究』(泰文堂、昭和46) 参照。
- ⑨ 注①の上方語についてのもの。
- ⑩ 加藤毅『岐阜県方言地図』(油印、昭和43・12) 参照。
- ⑪ 湯沢幸吉郎「徳川時代言語の研究」、坂梨隆三「ラ行下二段活用
の四段化」〔国語と国文学〕昭和50・1) 参照。
- ⑫ 拙稿「近世尾張方言におけるラ行下二段敬語辞の一段化」〔文芸
研究〕83、昭和51・9)「近世尾張方言の一段化をめぐる覚書」〔国
語学研究〕16、昭和52・3)。
- ⑬ 拙稿「東海西部のサ変動詞セルの成立をめぐる」〔国語学〕
130)。
- ⑭ 拙稿「近世尾張方言のサ行イ音便」(『岩手大学教育学部研究年報』
40—1)。
- ⑮ 雑俳資料は、鈴木勝忠『未刊雑俳資料』によった。伊勢のものは類
似題が多いので鈴木氏の刊行期番号でしめた。その他、濃尾の戯作
資料については、注①拙稿にふれてあるものによる。